

わが街——大学のある風景

落合の歴史と文化

和田 サヨ子 ●聖母大学特任教授



東京都新宿区落合

JR目白駅から西に一キロメートル余り、下落合の聖母坂通りに面して目白聖母キャンパスがあり、上智大学総合人間科学部看護学科及び聖母大学が設置されている。この地にカトリック修道女会「マリアの宣教師フランシスコ修道会」がローマ法王ピウス十一世の呼びかけに応え、一九五〇年に日本初の看護短期大学として聖母女子短期大学を開設して以来、カトリック精神に基づく看護教育がこの地に始まり、二〇〇四年から聖母大学へと六十余年受け継がれている。

●落合（らくがひ）

キャンパスが位置する新宿区落合地区は、面積三・一三平方キロメートル、人口は五万三七〇三人（二〇一三年第三七回新宿区統計）。かつて江戸近郊の農村であった同地区は、明治以降ものどかな田園風景と閑静な住宅地の広がる地域であり、豊かな緑と静かな環境にあこがれた多くの文化人、芸術家が住んだことから、歴史と文化を今に伝える街である。大正から昭和の初めにかけて小説家の林芙美子や舟橋聖一、吉屋信子らが執筆活動の大半を落合で行った。洋画家佐伯祐三はア

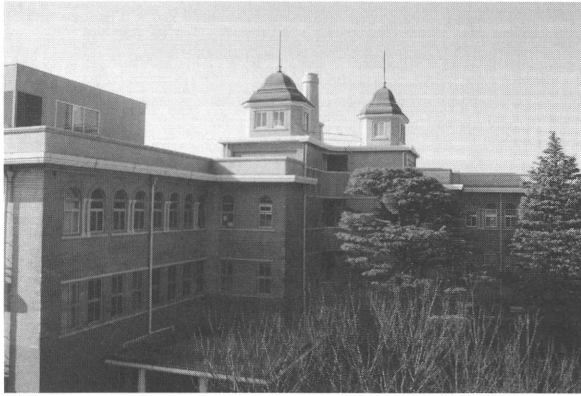
佐伯公園



トリエはキャンパスに隣接していて、現在「佐伯公園」の名称で、新宿区立公園として一般に開放されている。

落合という地名は、神田川と妙正寺川が落ち合うところから由来していると言われている。神田川と妙正寺川からは数多くの遺跡が発見されており、古代から人々の営みが行われていたことがわかっている。最古級の遺跡

トリエを建て、落合の風景を描いた。中でも「下落合の風景」はあまりにも有名である。彼の親しんだア



の一つからは、約三万年前の旧石器時代後期の石器が出土している。また落合遺跡は、縄文時代から奈良時代までの複合集落遺跡で、神田川・妙正寺川流域の重要な遺跡の一つである。

●聖母病院との連携

上智大学総合人間科学部看護学科の実習施設でもある聖母病院は、聖母坂通りを挟んで大学の向かいに建っている。聖母大学と同じ修道女会により設立された。新宿の名勝に数えられる二つの塔をもつ建物は東京都選定歴史的建造物であり、最近病院の改築を機会に外観を復元した。東京都生活文化局が以下のように指定している。

「昭和六年（一九三一）キリスト教の精神に基づき開院した国際病院で上智大学などを手掛けたスイス人の建築家マックス・フィンデル氏

により、設計された。鉄筋コンクリート造り三階建ての建物である。薄茶色のタイル張りの外壁とし字型の建物中央の頂部にある銅版葺き屋根の二つの塔が特徴となっている。縦長の窓が配置されるが、三階部分は、上部をアーチ型にして変化をつけている。入隅に曲面を用い軒の小庇や窓台で水平線を強調するなどの点は、当時、流行したデザインである。建物前面には、新宿区保護樹木のヒマラヤ杉の大本が立ち、壁面の茶色と調和した景観を形づくっている。平成十五年（二〇〇三）新病棟の改築に伴い本館の外観を当初に復元した」

●目白聖母キャンパスと地域の交流

目白聖母キャンパスと落合地区との地域交流の一つに、秋の運動会における救護班としての参加がある。また、聖母病院との連携企画として「ふれあい保健室」「子育て支援」を実施している。これらは、介護予防に関するテーマでの身体口腔、排泄機能についての相談サービスである。地域のニーズとしては、「ふれあい保健室」の企画に七〇代の高齢者の方が参加している。「子育て支援」は、産後退院してからの母親のストレス発散を目的にしている。

これらの地域との交流活動は、カトリック精神に基づき「人々のために人々とともに」を目指す学習体験である。

聖母大学は二〇一四年三月をもって閉学となるが、看護教育は上智大学総合人間科学部看護学科が継承し、同じキャンパスで今後も続けられる。

地域と共に生きる人間学部

山崎 省一 ●石巻専修大学人間学部長

一 大学の理念

石巻専修大学は一九八九年四月に、理工学部（四学科）と経営学部（一学科）の二学部で発足した。その後、時代の変化とともに、石巻圏域から女子生徒が進学しやすく、地域貢献ができる学部・学科の新設などの要望が出されていた。この要望を実現すべく検討してきた結果、二〇一三年四月に人間学部（人間文化学科と人間教育学科）を開設するとともに、理工学部の基礎理学科と生物生産工学科の二学科を廃止し、食環境学科と生物科学科へと改組した。

石巻専修大学は専修大学と同一法人であることから、「社会に対する報恩奉仕」とともに建学の精神としているが、「建学の精神」を二一世紀の社会に向けて具現化するために、新

たに二一世紀ビジョンとして「社会知性の開発」を掲げた。「社会知性」とは、「専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の課題解決に取り組んでいける能力」としている。

現在、社会は産業を含めて、世界的規模で著しく発展し、かつ変動している。それに伴い不安定さも増し、解決しなければならぬ課題、すなわちエネルギー問題、環境破壊、テロ・紛争、コンピューター・ネットワーク、人口問題、貧困、格差、感染症などが多々発生し、未解決のまま次の新たな問題を生じる事態となっている。このような現代社会にあつて、「社会知性の開発」を私自身は、予想もつかないような課題に直面した際に、最善の解決策を見いだせるような能力と理解し、学生諸君にはそれぞれの「社会知性」を独自に「開発」





してほしいと考えている。

石巻専修大学は「地域に根ざした大学」として、宮城県 of 石巻市、東松島市、女川町との包括協定締結や、近隣高校などとの連携事業を実施している。今回の人間学部の設置、理工学部の改組はその反映であるが、当初より、本学の建学の精神を実践するため、さまざまな地域貢献活動を展開している。

その中核を担ってきた大学開放センターは、地域の文化・教育の振興並びに地域の活性化・産業の振興を目的に、開学と同時に設置された。小中高校向けの講義・講演や青少年のための科学の祭典、大学開放講座などの教育支援のほか、産学官連携支援として企業向けの経営改善人材育成、技術開発

などのための講演、研修会、経営・技術相談、共同研究などの取り組みを行っている。

その後、主に研究面から地域の課題解決に向けた支援を目的として共創研究センターが設置され、東日本大震災を契機に復興共生プロジェクトを立ち上げ、被災者支援、産業支援、防災・復興関連研究、復興を担う人材の育成等に関する事業を展開している。

また、大学開放センターと協力して、国内外からの多様な要請への対応として、大学施設の提供、防災や復興に関連する講演会やシンポジウムの開催、視察者や研修生の受け入れ、共同研究などにも積極的に取り組んでいる。

二 人間学部では

現今の日本の大学に求められている大きな流れの一つとして、グローバルな人材の育成が挙げられる。人間学部においても、グローバルな人材育成を目標とはしているが、家族や地域に対するしつかりした理解と、これらをしっかりと支えようとする思いをもった人材の育成が特に重要であると考えている。

「地域」の成り立ちの最小単位が「家族」であり、「家族」の集合体が「地域」であることは言うまでもない。この「家

族」こそが人間理解と人間関係の土台であり、家族で和を育み、その和を地域へ、日本へ、さらには世界へと広げていくことが、「地域づくりの活動」の基本と考えている。紛争や貧富の拡大、エネルギー問題など、今日の社会で起きている世界的な諸問題と、町や地域の問題はその本質において共通していると言える。家族や地域をつくり支える人材を育成することが、町づくりの貢献につながり、ひいては現代の諸問題を解決する力となると考えている。

人間文化学科では「文化を通して地域づくりを支え、貢献する人材育成」を、人間教育学科では「人を育てることに貢献する人材育成」を目指している。目まぐるしく変動し課題が山積している今日、明快な解答を導き出すのは容易なことではないが、大学における四年間の学びを土台に、つねに学習する姿勢を持ち続けることによって、最善の解決策を見いだそうとするような人材の育成ができればと考えている。

人間学部は、二〇〇九年から設置準備を進め、二〇一二年に文部科学省に学部設置のための認可申請書類を提出し、二〇一三年四月の開設となった。二〇一一年三月に東日本大震災が発生したことにより、石巻近隣地域からの石巻専修大学に期待するところが大きく変貌し、特に人間学部においては、震災からの復旧・復興に貢献する人材育成が喫緊の課題となった。このため、提出までの一年間の中で、地域からの要望

に因應べく、「復興の社会学」「地域防災論」などの復興などに関わる科目や、子どもや被災者に対する心理的なケアに関わる科目を追加するなどの見直しを行った。開設一年目で開講科目が限られるため、正課外を中心に、小学校などへの学習ボランティアなどの派遣もささやかながら始めている。今後、学生数が増えるにしたがって、対象や範囲を拡大させる方針である。

三 人間学部での学び

人間学部は、人間文化学科と人間教育学科の二学科からなる。

人間文化学科は、これまで生み出してきた多種多様な文化について、学際的な視野のもとに、言語文化、芸術文化、生活文化、地域文化といった側面から学ぶとともに、地域の発展と生活支援に必要とされるさまざまな実践的な知識と技能を修得することを教育目標としている。学生は、社会人・職業人として必要な教養、スキル、人間力を身につけるための基本的な科目、及び人間文化について学ぶにあたってその基礎となる人間学と文化学全般について幅広く学ぶ。その後、学生個々の関心に応じて選択した履修モデルに従って、言語文化、芸術文化、生活環境、地域社会の各分野についてより

専門的な立場から深く学ぶ。そして、それまでの学習を踏まえて自ら設定したテーマについて研究を行い、その成果を最終的に卒業研究としてまとめる。

人間教育学科は、人間や社会について基本的な理解を基盤として、保育・教育についての専門的な知識・技能をしっかりと学び、地域に密着した問題解決型の体験学習を通して保育者や教育者に必要な人間的な資質を身につけ、地域社会の教育活動や福祉活動に貢献できる資質を身につけることを教育目標としている。学生は、社会人・職業人として必要な教養・スキル、人間力を身につけるための基本的な科目、保育や教育、心理や支援の基礎を総合的に学ぶ。以上のような基礎的・基本的な科目を学んだのち、保育・教育・心理と支援といった専門分野に関することがらを学ぶとともに、これまでの知識や技能を現場での実習を通して確認し、修得できるようにしている。

四 カリキュラムの特徴

(一) 人間文化学科

人間文化学科では、学生自身がその中から自己の関心や進路希望などに応じて選択する一つの履修モデルを設けている。

第一のモデルは、諸外国の言語文化の特徴や背景を学ぶと

ともに、外国語によるコミュニケーション能力の修得を目指す「地域文化研究モデル」であり、ここでは英語圏、フランス、中国など諸外国の言語と文化を日本語及び日本文化と比較・研究し、それぞれの言語と文化の特徴や背景を学ぶ。卒業後は、観光業やホテル業を中心としたサービス業の分野、中学校、高等学校、英語教室などにおける英語教育の分野での活躍が期待される。

第二のモデルは、地域社会における芸術文化振興の推進を担う人材を養成する「芸術文化研究モデル」であり、ここでは日本と諸外国の文学をはじめ、さまざまなジャンルの芸術について、その文化的背景に注目して研究を行うことによって、芸術を通して文化のあり方について理解を深める。卒業後は、美術館、博物館、資料館などの各種文化施設、あるいは文化関連のNPO法人や自治体において地域の文化振興に貢献することが期待される。

第三のモデルは、地域における各種生活支援に貢献する人材を育成する「生活環境モデル」であり、ここでは生活文化に焦点を当て、環境科学、生活科学、福祉学、心理学などを学ぶとともに、それらの知識をもとにさまざまな課題研究を行うことで、地域の生活文化について多面的に理解する。卒業後は、地域の住民センター、生活支援センターなどの活動を通して、地域における各種生活支援に貢献することが期

待される。

第四のモデルは、地域社会の創成や振興に貢献できる人材を養成する「地域社会モデル」であり、ここでは地域社会に焦点を当て、地域における教育や産業や政策について学ぶとともに、それらの知識をもとに地域活性化に関する課題研究を行うことで、地域社会の現状と課題について理解を深めていく。卒業後は、自治体の各種社会教育・生涯学習関連施設などにおける活動を通して、地域の発展に貢献することが期待される。

(二) 人間教育学科

人間教育学科では、三つのモデルを設けている。

一つ目は初等教育モデルで、保育や教育の基礎となる人間に関わる学問、教育の本質、幼児・児童の心理や発達、教育実習等の専門科目を学ぶ。卒業後は幼稚園や小学校の教諭、教育関連施設、教育関連企業への就職を目指す。

二つ目は幼児教育モデルで、初等教育モデルと同様、乳幼児を対象とした学修をする。卒業後は保育所、児童養護施設、指導相談所、幼稚園の教諭などへの就職を目指す。

三つ目は学校心理モデルで、初等教育モデルと同様の内容であるが、認定心理士になるための講義科目（二五科目）を付加している。卒業後は小学校、児童相談所、幼児や児童の心のケアにあたるNPO法人などへの就職を目指す。

特徴的な授業の例を挙げると、「ゼミナール」（基礎総合演習）では、自分で設定し、研究・調査したテーマについての発表を行う。その他、地域や現場の見学を通じた学習、外部講師による講演、学生・教員の親睦を兼ねた活動、大学祭などでの成果発表などを行う。「実習」では、大学で学んだ知識や技能を、実際の現場で実践し、確認することを通して、保育者や教員に必要な資質の確実な定着を目指している。一年生から保育所、幼稚園、小学校、施設などの保育・教育現場を経験させることにより、保育とは何か、教育とは何かについて現実的な視点から学ばせる。

(三) 両学科に共通する目標

両学科に共通する目標は、地域の社会を支える人材、地域の教育に貢献する人材の育成であり、「地域」に焦点を当てている点である。

地域の文化施設や教育現場に向いて、観察・経験したことをまとめ、それを自分の言葉で情報発信できるようにすることを教育の基本方針としている。日本文化について深く学ぶとともに、さまざまな文化の体験を通して異文化に対する理解力を高めることで、世界の中での日本人としてのアイデンティティを確立し、異集団との関係性（チームワークなど）を構築できる能力の習得を目指している。

さらに、現場で経験することによって、責任感、使命感、

協調性などを身につけ、必要と思われる各種資料を自発的かつ積極的に検索するとともに、地域の人々や同僚などとの深い議論ができる能力を獲得できることを期待している。石巻圏域の有能な人材を活用し、大学と石巻市民が共に学生を育てる環境をつくることを通して、新しく直面するであろうさまざまな事象に対して、自らが考えて行動できる学生を育成したい。

五 学生に期待すること

石巻専修大学へ入学する学生の出身を地域ごとに見ると、一九八九年の開学当初は全国各地から応募があったが、ここ数年は関東以北、新潟と東北六県からとなっている。人間学部では最初の入学試験の結果、宮城県、岩手県南部と福島県の出身学生が大半を占めた。これは、二〇一一年に起きた東日本大震災や設置認可の遅れ（十二月末認可）などが影響しているものと考えられる。

入学生のお多くは、東日本大震災により家屋の喪失、親戚や友人を失うなどの直接・間接的な影響を受けている。被災経験者は全国の大学に入学しているが、石巻専修大学の場合、その率が非常に高い。特に東北沿岸地域からの入学生は、数週間から数カ月間にわたり学校の体育館やコミュニティセンタ

ーなどでの避難所生活を漏れなく経験していると言っても過言ではない。人間学部にとつて、被災した学生は大事な宝であると同時に、その体験もまた貴重な財産であると考えている。

石巻専修大学で過ごす四年間の中で、被災した学生は震災を冷静に振り返りながら、これからの自身の復興との関わり方について探究してほしい。被災経験のない学生は、体験した学生との交流や石巻圏域の復旧・復興の過程を身近に感じながら、ボランティア活動なども体験しながら、自身の発展と今後の社会への貢献につながるような学修への取り組みを期待したい。人間学部においては、教育課程はもちろん正課外も含めて、地域との連携も一層図りながら、実質化がかなうように支援する計画である。

本学の「地域に根ざした大学」とは、地域の人材、自然、文化財、施設などのさまざまな資源を教育・研究に生かしながら、地域で活躍できる人材を育てることである。しかしながら、東日本大震災で最も多くの犠牲者を出した石巻で学生が過ごしたことを考えれば、宮城県内や地元への就職に固執することなく、被災者としての経験あるいは被災地で学んだことを、後世まで語り継がれるように広く日本各地へ、さらには世界へ向けて語り部として発信し続ける人材を育てることも石巻専修大学の責務と考えている。

生命力を引き出す慈愛の看護師を育成

中泉 明彦 ● 創価大学看護学部長

一 教育理念

創価大学は、創立者・池田大作先生によって提唱された①「人間教育の最高学府たれ」、②「新しい大文化建設の揺籃たれ」、③「人類の平和を守るフオートレス（要塞）たれ」を建学の精神に掲げて、一九七一年に創立された。

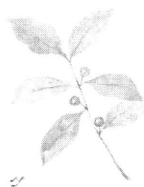
創価大学は、①「人間教育」を目指し、豊かな人間性を基盤として、人類が直面する課題に真摯に取り組み、智慧を発揮していく「創造的人間」を育成し、②人種や民族や文化の差異を尊重・理解し、成長の糧とし、遠いところで苦しんでいる人々にも同苦・連帯する心をもった地球市民、すなわち「創造的人間」の連帯をもとに新たな地球文化建設の揺籃たることを目指し、③世界のあらゆる人々と開かれた対話を展開する平和のフオートレスを目指す。この教育理念は、本学の創立五〇周年（二〇二〇年）を目指して策定されたグランドデザインの中でも再確認された。そして、本学が担うべき人材育成の分野の検討が、五〇周年へ向けての課題として

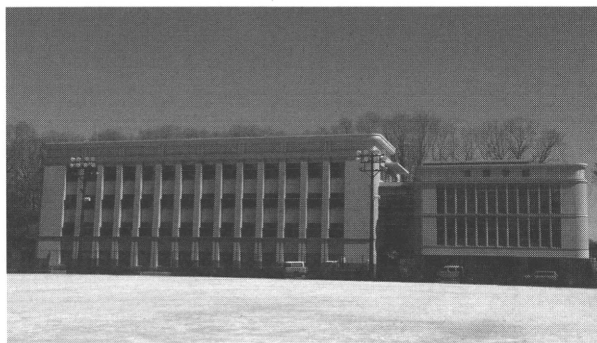
掲げられた。すなわち、既存の法・経済・経営・文・教育・工の六学部の新編と、新学部の設置の検討である。

二一世紀に入り、世界金融恐慌に続く景気の後退、雇用の構造的変化、社会保障制度の根幹からの揺らぎなど、わが国が直面する多くの課題の根底には、驚くほどのスピードで進行する少子・高齢化の問題が横たわっている。広がり続ける経済格差と、介護を必要とする高齢者の急速な増大によって、人間が人間として、その尊厳性を保ち、人間らしく生きることと自身が困難な状況が広がりつつある。そうした状況を克服するため、緊急に人材を必要としている分野として、医療・看護・介護・保育という分野がクローズアップされている。

本学の標榜する「人間教育」の中で、多くの学生が豊かな人間性を培い、他者への貢献の意欲を育んでいることを踏まえ、まさにこうした分野、特に看護の分野への人材輩出こそ、本学が取り組むべき課題であると結論するに至った。

これまでも、本学卒業生の中に、卒業後あらためて看護師の資格を取得して活躍している者もあり、本学の教育理念に照らして、ヒューマンケアを通じて社会に貢献する人材の育





成は、まさに本学が取り組まなければならない課題であると言え。そうした認識に立ち、二〇一三年四月に「看護学部看護学科」を設立し、時代・社会の要請に応える人材の養成を目指すこととした。

では、現在の社会が求める「ヒューマンケア」を実践できる人材とは、どのような看護師であらうか。それは、看護師という専門的職業人としてのスキル・知識の習得はもちろんのこと、人々の健康問題の根底にある構造的な社会問題にまで視野を広げ、適切に対応できる看護師である。

そこで、看護学部の人材養成の目的を「生命の尊厳を基調とし、生命力を引き出す慈愛の看護を実践できる人材の育成」と定めた。創立者は米ハーバード大学での講演（一九九三年）で、大乘仏教の視座から永遠の生命観を論じた。親族や親しい友人の死は大変悲しい出来事だが、死とは忌むべきものではなく、人間の睡眠のように次の生への

充電期間である。死とは生と同じ恵みである、と。こうした生命観の獲得を、「生命科学」の学習を通し、病者や老人との交流によって生命の尊さとかげがえのなさを経験する実習の中で、またキャンパス内外での学生同士、教職員との交流対話の中で目指す。医療現場で患者の死に直面した際、最も近くにいる看護師がいかに患者や家族に寄り添えるか。それは、確かな哲学によって生命を真正面から見つめることで初めて可能になる。

二 カリキュラムの特徴

「看護」に関わる高度な専門的知識と技能・技術を身につけるとともに、総合大学としての多彩な教育リソースを活用して、幅広い教養と豊かな人間性を併せもつ看護師を育成するための学士課程プログラムである。

（一）アドミッションポリシー

創価大学看護学部は次のような学生を求めている。

- ① 心身ともに健康で、生命の尊厳を探究し生涯学び続けるいこうとする学生
- ② 適切なコミュニケーションを通じ、良好な人間関係を形成しようとする学生
- ③ 人間の心と体に関心をもち、科学的に理解しようとする学生
- ④ グローバル化する健康問題に関心をもち、自発的に問題



の探究をしようとする学生

(二) カリキュラム・ポリシー

前記の学生に対して、後記に掲げる五つの学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を実現するために、以下の方針に基づき教育課程を編成・実施する。

(1) 生命の尊厳性を探究し、確固たる生死観形成の基礎を培う。

・ 自他の人間存在への深い理解と洞察の深い理解と洞察力を養うため、共通科目から一八単位を必修とする。

・ 生命活動のプロセスとメカニズム理解のため、基礎医学関連科目を配置する。

・ 人間生命の哲学的・倫理学的意義を考究する科目を配置する。

(2) 人間を総合的に理解し、科学的根拠に基づいた看護実践能力を身につける。

・ 科学的根拠に基づき思考方法を養うための科目を配置す

る。

・ Evidence-Based Nursingを実践する能力を養うための科目を配置する。

(3) 看護・保健・医療・福祉の場における協働のための基本的能力を身につける。

・ コミュニケーション能力を養うための科目を配置する。

・ 社会福祉・医療に関わる法制度並びにその運用の実態を学ぶ科目を配置する。

・ 多職種の役割・機能を理解し、チーム医療について学ぶ科目を配置する。

(4) 複雑に変化し続ける環境に対応し、生涯にわたり自己を向上させていく学習推進能力を身につける。

・ 臨床の場において必要な情報を、適切に収集・活用するための能力を養うための科目を配置する。

・ 自ら課題を発見し、探究する能力を養うための科目を配置する。

(5) グローバルな視点から人々の健康問題を理解し、国際社会の中で他者と協同することのできる能力を身につける。

・ グローバル・イットシューに対する関心、語学を基礎としたコミュニケーション能力、異文化との相互理解からなるグローバルリテラシーを身につけるための科目を配置する。

・ グローバルリテラシーの基礎となる英語科目を習熟度別で配置する。

(6) 多様な自然・社会・文化的環境の中で生きる人々の生活と健康への理解・関心を促すための科目を配置する。

(三) カリキュラムの特徴などの解説

(1) 「人間力」の養成

総合大学の強みを生かした豊富な教養科目を有機的に体系化した「創価コアプログラム」を通じた教養教育により、「人間力」をつけていく。

創価コアプログラムは、創価大学で学ぶことに誇りを持ち、所属学部にかかわらず、全員が「大学科目」「語学」を学び、かつ「人文科学系」「社会科学系」「自然科学系」のすべての分野にわたる幅広い教養を身につけることを目指すプログラムである。大学科目として「人間教育論」「現代文明論」「大学論」「共通基礎演習」が開講されている。例えば「人間教育と創価大学」の授業では、創立者による草創期の創価大学での講演「創造的人間たれ」や米コロンビア大学での講演「『地球市民』教育への一考察」などを学ぶことで、創価大学とはどういう大学であり、何を目指しているのかを考え、大学建設の未来を展望し、創価大学の歴史と理念を知り、議論することを通して、自身が大学で学ぶことの意味と課題を見定め、創価大学の建学の理念を理解するとともに、自律した学習者を目指す。

本学部は、「文章表現法」と「コンピュータ・リテラシー」を必修としている。「文章表現法」では、実際のレポート例を参考に、配付物やワークシートを活用しながらレポートの

基本ルールを学び、話し合い学習法を用いてグループワークや実習形式を取り入れながら、最終的に二四〇〇字程度の書評レポートを書き上げる。「コンピュータ・リテラシー」では、資料を集め、表計算ソフトを用いて目的に応じてデータを分析し、ワープロを使ってレポートを作成し、PowerPointを用いて発表するなどの情報スキルを身につけるとともに、コンピュータやインターネットを安全に利用するための情報倫理とマナーについての知識を身につける。

(2) 少人数クラスによる学習効果の向上

医学や看護の専門科目の講義科目では、八〇人の学生を対象とするが、標本、模型、映像資料などを効果的に活用することで、看護実践の確固たる基礎を形成する学習を促す。演習は、一学年八〇人の学生を、内容によって四〇人・二〇人のグループとし授業を行う。演習では学生六～八人に一人の教員が指導にあたる。基礎看護学の講義科目である「看護学概論」「看護理論」の授業では、抽象概念を扱う内容が多く含まれているので、学生の理解を確認しつつ進めていくため、四〇人のクラスとした授業運営を行う。その他の授業においても、授業中にグループワークなど少人数・学生参加型の教育方法を取り入れ、教員との交流の機会を増やし、教員と学生、学生同士の人格的交流を通し、相互に研鑽し成長を図る。臨地実習においても、六名程度のグループとし、学習状況の把握をきめ細かく行う。

(3) 看護師育成に特化した「確かな看護実践力」を養成

看護師教育で修得すべき技術項目と卒業時の到達目標を明確にして、高いレベルでの到達度を実現するため、看護師育成に特化したカリキュラムとした。講義・演習・実習を連動させ、科学的根拠に基づく実践力の養成を重視している。特に実習では、一年次前期から病院実習を行い、看護の「対象者を理解すること」を学ぶとともに、後続する学習への興味・関心・意欲を高める。二年次後期は患者に看護援助を実施する実習を行う。三年次前期後半からは各領域別実習を行い、多様なライフステージや対象の状況に応じた看護援助を学ぶ。最終実習となる四年次後期の「看護実践統合実習」では、これまでの学びの中から学生がさらに深く学びたい領域で実習を行う。先端医療を担う病院から在宅看護までの幅広い医療・看護の現場で、確かな看護実践力を発揮できる看護師を育成する。医療・看護の第一線の現場を知る教授陣による豊富な経験をもとに展開される講義や実習により、人体の構造・機能の理解を基盤としながら、社会的・心理学的にも「人間」を見つめ、的確な判断ができる確かな看護実践力を養っていくとともに、人間生命に備わる自然治癒力に働きかける、つまり「生命力を引き出していく」看護の姿勢を身につけていく。

(4) グローバルマインドをもった看護師の育成

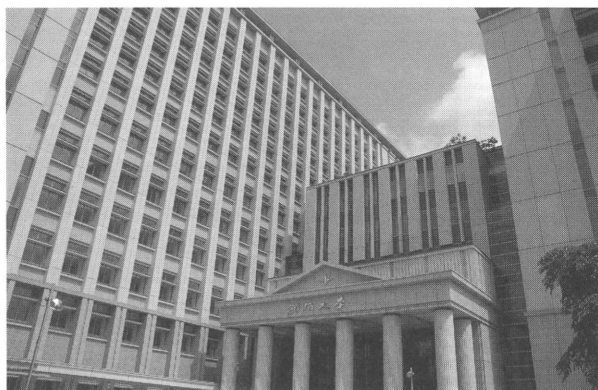
本学部は英語六単位が必修である。語学力を基盤に、異なる文化・価値観への興味や、相手の気持ちを理解して自分の思いを伝える意欲、すなわち「グローバルマインド」をもった新時代の看護師を要請する。そのためにTOEICのスコ

アによる習熟度別クラス編成を行い、実践的な英語教育を実施している。学内でのネイティブの教員、留学生との交流のほか、希望者には海外の大学と提携して病院などでの研修も提供する。看護師教育で定評のあるフィリピン・キャピトル大学での一期生二十八名の研修が本年三月に行われるが、さらに研修先を拡大していく予定である。

本学には、全学部共用の中央図書館がキャンパス内に整備されており、約一〇〇万冊が収納されている。また、雑誌約七四〇〇種、電子ジャーナル約一万九〇〇〇種が閲覧でき、総合大学の図書館として十分な機能を提供している。さらに本学部設置にあたっては、看護学部棟内に専用図書館を設置し、医学・看護学を中心とした専門書、学術雑誌、データベース、電子ジャーナルを整備することにした。開設時には、和書約四〇〇〇冊、洋書約一〇〇〇冊、学術雑誌五三種、視聴覚資料としてDVD六八点が整備される。開設年度以降もデータベースの購入を含め図書などの整備を継続的に行っていく。完成年次には、図書は和書及び洋書を計約六〇〇〇冊整備し、中でも洋書については、本学部の特色の一つである「グローバルな視点をもった看護師」の養成を推進するため約一二〇〇冊を整備していく。

(5) 生涯学び続ける看護師の育成

私は医学部を卒業して二八年になるが、この間に学生時代に学んだ医学の常識や検査法・治療法はいくつも変わっている。その行為が人の生死に直結するがゆえに、医療従事者は



卒業後も生涯学びが続けていくことが特に重要である。変化し続ける環境の中で課題を発見し、問題を解決する「適応力」や「応用力」を育み、自ら成長し続けていける看護師を育成する。

(6) 地域連携

昨年十二月の二日間にわたり、看護基礎科目「生活援助技術Ⅲ」の授業で、地域住民の方に模擬患者役として来ていただいた。ボランティアで模擬患者役になっていたと聞いた学生は、最高のケアをしようと夜遅くまで練習し、当日は、脈

拍や血圧の測定、洗髪、手・足浴などを行い、地域の方にとっても喜んでいただいた。

近隣地域の医療・介護施設などにおける看護水準向上に寄与するために設けた「看護学部地域連携準備室」が、本年二月に「認知症ケア」「心のケア」をテーマに大学周辺医療関連施設の看護職員を対象に公開講座を開催する。

三 将来への展望

創価大学は、創立者が示した建学の精神のもと、「学生第一の大学」を基本理念として、学生の主体性を重んじながら、新しき挑戦と創造を続けてきた。一昨年、本学は文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択され、昨秋、地上一二階・地下三階の最新鋭の設備を備えた中央教育棟GLOBAL SQUAREがオープンした。中央教育棟は「学生第一」の教育環境と学習支援を最大の目的として構想設計された。一〇〇〇人を収容できるディスカバリーホール、ラーニング・コモンズ「SPACES」、コンビニエンスストアや懇談スペース「ブラット」があり、廊下の両側などに懇談や自習のできるフリースペースもあり、学生の居心地のよい場所がふんだんに用意されている。学生の「能動的な学び」をサポートするラーニング・コモンズは二〇〇〇平方メートルあり、共同学習、語学学習、自習・PCルーム、学習相談スペースが結集されている。さらに本年四月には新たに国際教養学部がスタートする。

全学挙げて学生一人ひとりの可能性を引き出すために、今後教育プログラムと教育環境の充実に取り組んでいくとともに、初めての医療系学部として、人類と社会の未来に貢献するという高い志をもって、創価の看護の良き伝統を築いていきたい。

理念をもとに大学を創る——聖学院大学の例

一 大学の歴史

大学の歴史は、ヨーロッパの中世——一世紀にさかのぼる。すなわち法学のボローニャ大学を筆頭に、神学のパリ大学、医学のサレルノ大学が続いた。神学・法学・医学、それは神の意志の探究と神に応答する人間のスピリチュアリティ（霊性）面、国家や社会に関わる人間の生活面、人間個人の体と心としての全存在面に焦点を絞った分析と病状からの癒しを探索するものであり、神と社会と人間個人に仕える知恵の探究、すなわち言葉の正確な意味で実学の各大学であった。

さらにこの大学の基礎教育として、予科すなわち「自由七科」“septem artes liberales”と呼ばれるリベラル・アーツ（教養）教育が発展していく。これはさらに遠く五世紀のアルティアヌスⅡカペラの提唱による修道院教育に端を発したものである。カペラは、「知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた」との旧約聖書・箴言九章一節にちなみ、また、「人を自由にする学問」としての教養科目として七科を、さらに、

文法・修辭学・弁論学（弁証学）の三学“trivium”と算術（一次元研究）・幾何（二次元研究）・天文（三次元研究）・音楽（時間と運動を視野に入れた四次元研究）の四科“quadrivium”の二種にカリキュラム分類して聖職志願者たちを教育した。それが一般教養科目群へと発展していく。

ちなみに注意すべきは、当時の大学関係者が、大学が追究する学問は「人を自由にする学問」であり、また「人を解放する学問」であると考え、ギリシャにおいて「手のわざたる機械的技術」“artes mechanicae”の学問（例えば工学）と区別していたことである。また四科はともかく、三学はいわゆる「読み・書き・算盤」に該当する実践的な科目であり、現代的なアクティブラーニング教育、インターンシップ教育、ボランティア教育などの祖となり、さらに弁論学は暴力によらず理性的議論によってコンセンサスに至ろうとする現代的なデモクラシー教育の基礎となる。

しかし、近代前期まではいわゆる下級学部であった「自由七科」は、やがて拡大発展して「哲学部」とな

っていく。この哲学部が予科やいわゆる下級学部どころか、神学部・医学部・法学部と肩を並べる大発展を遂げて、「Ph.D.」の語に象徴されるように近代総合大学において「哲学は諸学の女王」たる位置を占めていく。一方、哲学部から理学部が分離独立し、法学部から経済学部が分離独立してゆく。この傾向は今日さらに細分化されていく。付記すべきは、これらの傾向のもとで一八世紀ごろから大学教育が教授の達成した学問業績のいわば詰め込み、すなわち“input”、教育の側面が強くなり、中世以来保持されていた“output”、教育の側面が後退したことである。

また欧州（特に西欧）の大学は多くの場合中世以来国家の文化振興の助成は受けてきたものの、基本的には教会立や修道院立という現代的概念では超国家的“NGO”立という私学であったということである。近代日本の民間の社会資本力がまだ弱く、官僚養成を帝国主導でつくることが急務であったとしても、前述のことは強調されねばならないし、当時においても優れた私学が現れ始めていたことも特筆すべきである。この歴史的経緯を踏まえて聖学院大学の歴史を展望する。

二 日本のキリスト教ディサイプルス派教会と聖学院の歴史

文明開化期の日本には、切支丹禁令の高札撤去以前より、多くのキリスト教宗派が伝道を開始していた。カトリック（イエズス会、ドミニコ会、フランシスコ会など修道会単位

でも）を先頭に、ロシア正教（東方教会各派を含む）、英国聖公会、ルーテル教会、改革派教会、長老主義教会、組合教会、バプテスト教会などである。米国メインラインチャーチ七派の一つ、ディサイプルス教会は相当遅れて日本伝道に入った。この教派は、分裂の一途をたどるキリスト教諸教派信徒をもう一度一つの聖餐台に集めるため、初代教会の原点に帰る運動であった。この派はいわば首都東京を素通りして遠く秋田に日本伝道の本拠を定めるほか、日本では特に教育の重要性に目をとめ、東京で男女神学校教育、女子教育、幼児保育に力点を置き、聖学院を創設した。神学校はやがて東京神学大学に統合されるが、保育と初等教育と女子教育とキリスト教教育に力を入れる各校として特色化されていく。

三 「聖学院大学の理念一〇カ条」をもとに開学するまで

高度経済成長の頂点に到達したかに見えた日本には、バブル崩壊直前であったが、チェルノブイリ事故などの環境汚染や教室でのいじめ問題など種々の深刻な課題が現れ始めていた。初等・中等教育に力点を置いていた聖学院としても、人格・人権尊重に立った聖学院独自の高等教育を展開すべき時を迎えていた。先に女子聖学院短期大学を創設していた聖学院であったが（一九六七年）、理事会は大学院も視野に入れた本格的な四年制大学を創設すべき時であると判断し、一九八五年、大木英夫理事長（当時）を長とする大学設置理念検

討委員会を発足させ、近藤勝彦理事（当時。のちの東京神学大学長）の素案をもとに、一〇回以上に及ぶ検討ののち「聖学院大学理念一〇カ条」を制定した（一九八八年正式施行）。その概要は以下のとおりである。

第一条 自由と敬虔の学風による真理探究と霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努める学術研究・教育文化共同体としての大学の自己規定。

第二条 プロテスタント・キリスト教の伝統に即して行われる礼拝を大学の営みの生命的源泉とすること。

第三条 プロテスタント・キリスト教が近代社会の成立と展開に固有の貢献をなしてきたゆえに、その現代社会・文化に対する責任を大学形成によって果たすこと。

第四条 プロテスタント・キリスト教会および聖学院神学校が合流している東京神学大学および内外のプロテスタント諸大学との協力に努めること。

第五条 現代文化の諸問題とキリスト教の課題等の問題を追究してゆくことをとおして、国際化した時代と激動する社会変動による諸課題と積極的に取り組むこと。

第六条 本学の設立母体である聖学院諸学校との密接な協力関係を保ち、聖学院一貫教育の高等教育段階を担うこと。

第七条 キリスト教精神による全教職員の相互協力が期待されること。

第八条 教授は、福音的自由と倫理への畏敬をもって研究教育に尽瘁し、学問の創造的取組みに貢献することが期待さ

れること。

第九条 学生は、知的・実践的・霊的に成熟し、明日の社会を担いうる教養と良識を身につけ、人格形成に励むことが期待されること。

第一〇条 いかなる組織体やイデオロギーの介入、暴力による破壊を許さないこと。

本学は、開設準備段階から今に至るまで、教育・研究・経営などすべての営みをこの理念のもとに一貫して進めてきた。少子高齢化、バブル崩壊後の日本の経済力の低下に対する「人材」の促成要請、方針が蛇行する日本の教育政策などの中で、本学は一貫してこの理念に堅く立ってきたことは、本学の固有の存在意義を主張するものであったと自己評価したい。

四 学校法人聖学院・教育憲章の制定

さらに二〇〇〇年から三年をかけて全学院の教職員参加により教育会議を開催し、「聖学院教育憲章三カ条」にまとめ創立一〇〇年の歴史を振り返り、そのよって立つ教育精神を表現した。

第一条 聖学院教育の根本目的は、日本国憲法（一九四六年制定）と（原）教育基本法（一九四七年制定）の精神に即して人間を育成すること。

第二条 聖学院教育の理念は、一人ひとりが神からかけがえない賜物を与えられている確信に基づき、ナンバーワン教育でなくオンリーワンフオーアザーズの教育であること。

第三条 聖学院教職員は、サーヴァントリーダーシップの精神をもって自己革新に努めること。

聖学院教育憲章は、教育基本法改訂の動きが顕著であった際、戦前以来一貫して歩んできた聖学院教育の粋を文章にして憲章として大学を含む全教職員があらためて自覚したものである。日本国憲法は世界的に通用する普遍的価値観の客観的基盤を提示しており、原教育基本法はその中で活動する人間の根本規範、すなわち自発性の開花という自由の本質を体现できる人間性の育みである。温故知新として、あの中世欧州の三字は学ぶ者の主体的学びの育成であった。それが教育目標の明示とともに、人間の多様な可能性を開くと信じる。

五 聖学院大学が自覚している日本の教育界の使命

その後、あの東日本大震災が起こった。もともと日本は自然災害がしばしば襲う、世界でも有数の地域である。しかし今回の東北の人々の示された忍耐力、希望を失わない心、助け合う精神は、世界に強い感銘を与えた。この災害は決して東北の人々のみを襲ったものではなかった、共に受けた苦難であるとして、本学は子どもたちの心のケアのための学科を立ち上げ、ボランティアを率先して派遣してきた。これからの日本の教育界の使命は、狭い国民的自負心を意識的に高揚させることなく、こうしたわが国のみならず全人類の規模で襲ってくる予期せぬ苦難にいかに立ち向かい、絆を築きつつ助け合い、深刻な状況の中で生きる知恵と力を発揮できる

六 結び——理念をもとに創生すること

「人材」を養成することであると、聖学院大学は確信している。夏目漱石の『夢十夜』の第六夜に不思議な記述がある。主人公が夢の中で、東京護国寺の山門で運慶が仁王を彫っていると聞き見に行く。行ってみて運慶のよどみない彫りさばきに思わずうなると、野次馬の一人が言う。「あれは鑿や槌で顔をつくっているのではないのさ。木の中にすでに仁王が埋まっているのさ」と。そこで主人公は思う。「彫刻ってそんな簡単なことなのか。それなら自分にもできるぞ」と。ところが帰宅して風呂用の薪を片端から削るが何も出てこない。そこでこの小編は印象深い言葉で終わる。「明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないものだ」と悟った。それで運慶が今日まで生きている理由もほぼ解った」と。

この言葉は存在の本質を示唆している。ものごとには現実の有り姿に先行するビジョンが先行すべきである。同時にそのビジョンがあいまいとなり、状況やニーズへの即応型の当世のあり方を辛辣に風刺しているのであろう。高等教育にも明確な教育目標の明確な提示が絶対必要である。聖学院大学は理念の明文をもとに形成してきた。そのうえで、私は明確な理念が多様な他者評価拒否の独善的原理主義に陥らず、社会変動と学生の特質の変化を見極めつつ理念を現実に適応させていくダイナミックな姿勢をさらに明確にしたいと考えている。つまり理念の定数部分と変数部分の見極めである。

市役所と企業を対象とした 社会連携事業

城島 栄一郎 ●実践女子大学生活科学部長

実践女子大学日野キャンパスは東京の西部に位置し、文学部、生活科学部及び人間社会学部の三学部からなる。日野市は、日野宿として知られた昔からの交通の要衝の地であるとともに、日野自動車、コニカミノルタなどの企業、多摩動物公園、新選組のふるさと、水の郷百選に指定されるなど多彩な顔をもつ閑静な住宅都市である。学園創立一二〇周年記念事業の一環として、今年四月に文学部と人間社会学部及び短期大学が渋谷キャンパスに回帰移転し、この地には生活科学部だけが残ることになる。生活科学部は日野の緑多く落ち着いた環境の中で、衣・食・住の分野を中心に地域社会との関係を深めながら実践的な教育・研究を行っている。日野市役所とは

魚のさばき方の講習



学生からの提案



徒歩数分と近接しており、産官学の連携を積極的に推進し、地域社会へ貢献するとともに、学生が実社会体験を積むことによる学習意欲の向上と実践力アップを期待している。以下に最近の代表的な産官学連携の事例を紹介する。

「お魚セミナー」（平成二十五年年度）——東信水産株式会社と生活科学科との連携

魚消費低迷の中、企業と大学ができることは何かをテーマ



にして、食物科学専攻二年生を中心に一五名が参加している。セミナーで食品業の基礎知識を身につけ、セミナー終了後は実際に東信水産の店舗（新宿伊勢丹、銀座三越伊勢丹、渋谷ヒカリエ）を見学し、マーチャндаイジングの観点からこれらの店舗の売り上げを伸ばすための売り場や商品の提案をプレゼンテーションする。

「日本の田んぼを守る」(平成二十二年)——NP
O生物多様性農業支援センター(BASC)と株式会社

弘久社(印刷会社)と生活環境
学科プロダクト
デザイン研究室
との連携

BASCが取り組んでいる「佐渡地域環境再生ビジョン」のソフト領域(運動の啓蒙やグッズのデザインなど)の開発支援に二五名が参加した。研究・開発の手法としてはデザインフォーシックスシグマ(DFS)を

活用し、データの視覚化及び共有化を図っている。

「横断幕再生プロジェクト」(平成二十四年度)——中日本高速道路株式会社八王子支社と生活環境学科プロダクトデザイン研究室との連携

高速道路で使用された「横断幕のリユース」を提案した。

「日野駅改修プロジェクト」——JR東日本八王子支社開発部と生活環境学科との連携

「日野商店街の活性化プロジェクト」(平成二十五、二十七年)——日野市役所企画部企画調整課と日野商店会の有志及び生活環境学科と美術美術史学科の有志(七〇名)との連携

「東武百貨店池袋店レストラン街スバイスにおけるメニューの開発」(平成二十五年)——レストラン街のシェフと生活環境学科との連携

このほかにも、日野市の「こどもまつり」「よさこい祭り」「産業祭り」や「ひの新選組まつり」などに学生が主体となってボランティアとして参加している。

このような連携は、多彩な顔をもちながらコンパクトな日野地域ならではの共同事業と言える。学生にとって大学での学びが社会に役立つことを実感できる貴重な経験となっている。一方、企業や自治体側でも若者の新鮮な感性を採り入れる好機ととらえている。費用分担などの課題はあるが、大学としても資金面も含めてできるだけだけの支援をしながら、推進していきたい。

江古田の街と大学を つなぐ屋上養蜂

丸橋 珠樹●武蔵大学人文学部教授・江古田ミツバチプロジェクト顧問

8の字ダンスで花資源の位置を伝えるミツバチは、協力的な社会を生きている。多数の個体間でどのように情報が共有・処理され、最適な決定を行えるのか、人間社会のあり方を考え直す手がかりを与えてくれる。養蜂は、太陽の恵みを植物を通じて人が受けるという地球生態系をまるごと理解できるすばらしい作業である。また、ミツバチが大量に消える蜂群崩壊は新型農業の影響を受けているなど、小さなミツバチは人間を映す鏡である。

武蔵大学江古田キャンパスには巨木が多数茂っているが、九〇年前の武蔵学園創設時はほとんどが畑で、当時からの木は数本に過ぎない。創設以来、生徒たちが植林し、幾多の建設でも伐採することなく守ってきた木々である。「緑を創り護る」武蔵学園の伝統とイメージに合致するのが、植物と人をつなぐミツバチだったのである。

見学会で解説する学生と大学院修了生



江古田の地域住民と武蔵大学の教職員・学生が協同して養蜂を始めて四年が経過した。私の授業では、江古田ミツバチプロジェクトの武蔵産蜂蜜を味わってもらっている。加熱処理なしの生蜂蜜なので花の香りが漂い、「普段の蜂蜜とは全然違う。おいしい」と評判

だ。蜜蝋でリップクリームワークショップも開催している。学生は、自分の大学で収穫された食べ物や産品に、ちょっと幸せな気分と誇りを感じている。

この地域連携事業を始めるにあたって、代表谷口さんと銀座ミツバチプロジェクト（銀バチ）を訪れたのは四年前だった。一緒に行った学生や卒業生は、飛び回る数千匹の蜂を目

の前にして、怖そうに寄り添い、防護網つき帽子をかぶって、袖に手を引き込んでいた。銀パチの人が素手で作業する姿を見ているうちに、おそろおそろデジカメを取り出して、袖越しにシャッターを押し始め、作業が終わるころには、銀パチの田中さんから「蜂はかわいいよ」とミツバチを手に乗せてもらおうとほほ笑み、お互いに記念撮影していた。本学で始めても大丈夫だと納得できた。

蜂蜜はおいしいし、活動にも参加したい。しかし、蜂は刺す、怖い、危険、死ぬこともあると連鎖しがちである。一度自分の中に入り込んだイメージは増幅されてしまう。でも、養蜂を経験すれば、その連鎖が全く別の方向へと歩み始める新しい体験が新しい自分をつくっていく。大学連携事業成功の鍵は、自分の世界観や価値観がパチンとはじけたり、ガラツと変化したりする楽しい活動かどうかである。

学生に参画を促すプログラムには、少なくとも二つの条件が必要である。一つは、楽しみながらも自分が成長し変化したとの自覚を促す気づきが多いこと、二つ目は、学びのモデルとなる異世代の良き人が多数参加していることである。

学びの本質はまねることである。他の動物と違い、現代人が文化と技術を変化させ続ける源泉は、学習を支えている完全なる模倣能力である。赤ん坊でさえ、一度見た新規刺激を試行錯誤なしで模倣できる。大学は、模倣したいと思える多様なモデルが満ちあふれた場となるべきである。学ぶ意欲の

源は楽しさであり、したい・まねたいという強い欲求が、本学の教育理念である「自ら調べ考える」原動力である。

このプロジェクトでは、武蔵産蜂蜜を江古田のお菓子屋などに提供し、町おこしにもつなげている。学生は、新聞やテレビやラジオにも出演する機会を得て成長している。出前環境教育を通じて、子どもから大学生、一般市民まで含む交流の促進とコミュニティの回復の場ともなっている。

昨年は、練馬区と江古田三大学（日本大学芸術学部・武蔵野音楽大学・武蔵大学）の連携合同学園祭が実施され、練馬大根と武蔵産蜂蜜の江古田ジュースも好評だった。活動ロゴマークは日大芸術学部学生の作品だ。本学で毎年開催される市民

この活動ロゴマークは日大芸術学部学生の作品



環境会議では武蔵野音楽大学学生が演奏し、養蜂も日大へと広がっている。ミツバチが花を飛び回って種子を実らせるように、この活動が江古田の人々と本学を結びつけ、次々と実を結ぶように工夫を重ねていきたい。

地域と大学が一体となる特別な日

—常磐大学×水戸ホーリーホックコラボデー—

村中 均 ●常磐大学国際学部助教

●はじめに

学校法人常磐大学は、二〇一〇年に株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホックと連携協力協定を締結し、それより毎年、公式試合の一試合を「常磐大学×水戸ホーリーホックコラボデー」（以下、コラボデー）と銘打ち、本学校法人の各校の園児・生徒・学生が、試合運営及びイベントを実施し、会場を訪れた地域の方と共に試合を盛り上げている。コラボデーは地域と大学が一体となる特別な日なのである。その実施は、水戸ホーリーホックのホームスタジアムへの観客を増加させ、そのにぎわいを地域の活性化につなげることを主目的としているが、園児や生徒、学生らに新たな教育場面を提供し、地域の多様な人と触れ合い、学習することで、豊かな人間性をもった優れた人材を育成することも目的として挙げられる。

コラボデーには本学校法人関係者が招待されており、コラボデーを学校法人のステークホルダーとの交流の場、あるい

はステークホルダーへの教育成果の発表の場としてとらえることもできる。本学校法人は、実学を重んじ真摯な態度を身につけた人間を育てることを教育の目標としており、コラボデーはそれを具現化する象徴と言えるかもしれない。

●地域の未来を創造するコラボデー

これまで四回のコラボデーが開催されている。例えば、常磐大学幼稚園によるエスコートキッズ、智学館中等教育学校によるフェアプレイフラッグベアラー、常磐大学高等学校による試合開始前のエキシビジョンマッチやチャダンスパフォーマンス、ボールパーソン、また常磐大学・常磐短期大学は運営ボランティア、大学吹奏楽団とそのOB・OG会による選手入場演奏など、各校が試合運営上の重要な役割を担っており、コラボデーは学校法人常磐大学一色となる。

そして、集客イベントの企画・実施の中心を担っているのが、常磐大学国際学部経営学科の専攻科目「マーケティング実習」である。これは二次以上の科目であり、一年次のマーケティング関連の講義科目を基礎に実践を行う、科目名どおりの実習科目である（なお、同学科には、三年次以上のさらに高度な実践を行う「ビジネス専門実習」も用意されている）。具体的には、プロジェクトつまりPBL(Project Based Learning・課題解決学習)の形として、教員二名と既履修生のSA(Student Assistant)がファシリテーターの役割を担い、学生

手形で作ろう！ 応援メッセージ



フェイスペイント



が主体となったグループワークを中心に授業を展開している。このプロジェクトで履修生は、①集客向上のための調査、②アイデア化、③クラブと大学関係者参加のイベント（案）提案発表会の実施、④採用イベントの企画書作成、⑤イベント準備、⑥イベント実施までの一連の作業を経験することになる。例えば、これまで「美少女コンテスト」「コスプレ」「応援メッセージ（手形・バールンゲート）」など、学生ならではの発想による手づくりの集客イベントが実施されている。プロジェクト経験者であるSAの存在が知の移転を促進させ、

内容は異なっている、毎年より良い内容のイベントになっており、キックターゲットやフェイスペイントのイベントは毎年改良され、定番イベントになりつつある。また、コラボ後には、クラブ関係者参加の最終報告会を実施することで、プロジェクト全体の流れを振り返り、学んだ内容を確認し、学修成果について客観的な評価を行うようにしている。プロジェクトによって学生たちは、主体性、コミュニケーション力、協調性などが養われる。さらに、地域の課題に向き合うことで地域に対する責任を自覚し、その解決に向けた実践によって自らを成長させ、自信をつけ、地域に貢献できる人材となる。コラボデーとは、地域の「未来」をつくる特別な日とも言えよう。

●学校法人全体での取り組みの鍵

最後に、初等教育から高等教育までを擁する学校法人全体で、Jリーグの公式試合の運営やイベントを実施するという稀有な取り組みである「コラボデー」が継続的に実現できている仕組みを、「組織」という視点で簡潔に述べてみたい。本学校法人には地域との連携を目的とした「地域連携センター」が設置されており、窓口として、コラボデー実施に向けて本学校法人各校間そして法人・クラブ間の調整を担っており、法人全体で取り組む鍵となっている。